

東アジアの平和と共生を求める 松江発のメッセージ

日本と韓国・朝鮮と中国の識者が複合的な視点を提示

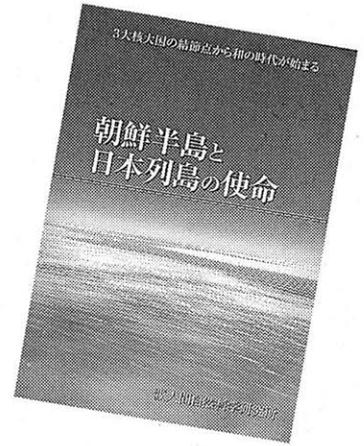
(財)人間自然科学研究所 編著

▶朝鮮半島と日本列島の使命

3大核大国の結節点から和の時代が始まる

2・22刊 A5判192頁 本体1000円

(財)人間自然科学研究所



本書は、松江の地にある人間自然科学研究所の編著になる。松江といえば、宍道湖と中海を臨む「水の都」として知られる。出雲の国に連なる古代日本神話をイメージする人も少なくないだろう。出雲阿国、小泉八雲（フカダイオ・ハーン）やNHK朝ドラの『だんだん』なども楽しく連想される。旧制松江高校の出身者には、図書新聞の創業者である田所太郎がいる。田所は、同期の親友・花森安治とともに東京帝大在学中に『東京帝国大学新聞』の編集・発行にあたった。そこには田宮虎彦、杉浦明平らもいた。その後、田所は、東大新聞時代に培った見識によって『日本読書新聞』編集長を務め、戦後、『図書新聞』を興した。その意味で、松江は図書新聞発祥の地ともいえる。

本書には小松昭夫「朝鮮半島と日本列島の使命」、幸珠・安齋育郎・小松昭夫による同タイトルの鼎談、李修

京「血と苦痛の涙で溢れる暗い未来を作らぬために」、孟白和として同せず、人間の正しい道、張可喜「和譲思想・東洋文化の核心」など、韓国・朝鮮、中国、日本にまたがる識者の論稿、講演が収録されている。またハーンが「神戸クロニクル」紙に寄せた8本の論説と曾孫の小泉凡の解説が再録されている。いずれも、日本と朝鮮と中国の友好関係をどのように形成し、東アジアひいては世界の非核平和をどのようににめざすかを考えさせ、読みごたえがある。

同研究所の小松昭夫理事長は、松江で生まれ育ち、松江を本地地とする企業経営者である。高速シートシャッターや上下水道自動制御・監視システムの開発・商品化に成功しており、ベンチャービジネスの先駆けとして知られる。その小松理事長は、同研究所を軸にして東アジアにかかわる平和活動をさまざまに展開している人でもある。2009年の2月22日には、島根県

島に象徴される抑制された対立構造は、『人類進化の入り口』という意味が込められて」と強調する(11ページ)。「対立」を逆転的に「共生」に転化するというのである。松江―独島という地理的な位置にあるからこそ、国家主義的な対立を排する立場に揺るぎがなく、「和」を求めてやまないのだから。

同研究所のロゴは、北極とユーラシア大陸の側から東海(日本海)および日本列島を臨む図である。つまり日本列島の南北関係が逆さまになっており、東海を中心に日本列島と朝鮮半島と中国、ロシアを俯瞰する図である。日本中心主義ではなく、この地域を「和の文化圏」にしようというメッセージである。

東日本大震災の被災と福島原発炉心溶融、その被曝という深刻な事態にやるせない思いを抱きつつ、世界共通語となつている「sunami」の語源が、歴史的な大津波を題材にした小泉八雲原作『稲むらの火』の英文表記であるとうとう

9年の2月22日には、島根県主権の「竹島の日」記念式典とは別に、講演会・シンポジウム「混迷の時代―出雲から陽が昇る」を開き、そこでドキュメント「安重根義士」を上映するなど、ユニークな活動をしている。「人類史の視点で地球経営を見据える理論」「人類の尊厳欲求が開花する共生の文化」を提唱している。そこから、朝鮮の領土である独島(竹島)に関連して、「対立状況にある朝鮮半島と、日本の間にある、竹島」の南北関係が逆さまになつており、東海を中心に日本列島と朝鮮半島と中国、ロシアを俯瞰する図である。日本中心主義ではなく、この地域を「和の文化圏」にしようというメッセージである。

東日本大震災の被災と福島原発炉心溶融、その被曝という深刻な事態にやるせない思いを抱きつつ、世界共通語となつている「sunami」の語源が、歴史的な大津波を題材にした小泉八雲原作『稲むらの火』の英文表記であるとうとう

※人間自然科学研究所 11-1004
島根県松江市乃木福富町735-1 888, Tel 050-3161-2460,
http://www.hns.gr.jp

(S)